

## 坪井芳洲と薩摩藩

泉 彪之助

蘭学者芳洲坪井為春が薩摩藩奥医師となり、島津斉彬に仕えたことは広く知られている。演者は、坪井芳洲と薩摩藩との関係を薩摩藩史料から明らかにしたいと考え、調査を行った。鹿児島県歴史資料センター史料編纂室、鹿児島県立図書館、宇和島伊達文化保存会の好意で、いくつかの知見を得たので報告する。

芳洲と薩摩藩との関係について、白金今里村薩邸植物園への居住、奥医師任命、薩摩への下国と滞在、斉彬死去の際病床に侍し、その容体書を作成したこと、江戸への帰府、が知られている。

今里村の江戸薩摩藩邸は、寛政十一年に京極寺岐守から土地をゆずり受けて作られ、後に白金お屋敷と呼ばれ、島

津斉宣はここに退隠した。芳洲が入居した年は嘉永二年説と嘉永四年説とあるが、史料的には決定出来なかった。

芳洲が薩摩藩奥医師に任命された年は、芳洲自筆の履歴書を始め、多くの文献が安政元年としている。斉彬史料中、『豎山利武公用控』に任命の経過が記載されていることを発見し、安政元年九月二十九日に坪井芳洲と改名し、同日奥医師に任命されたことが確定した。

大木忠益が坪井芳洲と改名した理由について、芳洲死去翌年に書かれた『坪井為春先生伝』によれば、米沢、薩摩の両藩で、他藩への移籍・入籍に抵抗があり、便法として改名したという。『豎山利武公用控』に書かれている経緯も、それを裏付けている。

芳洲の薩摩への入国は安政四年とされており、この年斉彬は四月に江戸を出発、五月に鹿児島へ到着した。藩史料では明らかに出来なかったが、坪井家家伝の史料では、芳洲は斉彬に同行したという。

安政五年七月、島津斉彬は裏急後重を伴う血便と発熱を来し、七月十六日に死去した。当時政治的に激動の時期であったため、斉彬の急逝は種々の疑惑を産んだ。斉彬の大

叔父にあたる福岡藩主黒田斉溥は、側近を派遣して斉彬死去の状況を調査し、芳洲が作成した容体書を添えて、宇和島の伊達宗城に秘密書簡を送った。宇和島伊達文化保存会の好意で入手した、この秘密書簡の写真を供覧する。芳洲作成の容体書の原本は現在失われており、その後の史料の詳細は別稿で検討の予定である。

斉彬の病気の本態については諸説あるが、消化器系感染症であると考えられ、循環虚脱など重症の中毒症状を伴っていた。

これに関連して、従来注目されなかった漢方医作成の容体書が、寺師宗徳の著書『贈正一位島津斉彬公伝』（明治四一年刊）に記載されていることを確認した。

芳洲はその後江戸へ帰り、幕府の蕃書調所教授手伝になるが、この帰府の年月も藩史料には見出だせなかった。幕府からの任命にもかかわらず、薩摩藩奥医師の資格は維新前まで続いている。その地位の終了は、藩の解体に伴う措置と考えられていたが、廃藩置県以前の慶応三年に退職しており、別の事情があったと思われる。宮崎ふみ子氏は、  
蜜書調所——開成所において、最初陪臣が採用されたが、

種々の問題が起こったため、後に陪臣が直参の身分とされたとしている。恐らく医学所にも同様の事情があり、これが薩摩藩奥医師の地位が終了した理由であろう。

第二十八代薩摩藩主島津斉彬は、幕末のもっとも開明的な藩主の一人であり、近代科学技術の輸入に多くの努力を注いだ。洋学についても坪井信道、高野長英、戸塚静海など多くの蘭学者を重用、あるいは親交を結び、また藩士を長崎、長州、適塾などに学ばせ、川本幸民などの英才を招いて振興につとめた。

演者は、坪井芳洲の年譜上の日時を一次史料から決定したいという末梢的な視点からこの研究を開始したが、調査の過程で斉彬の偉大さに印象づけられ、芳洲のことも薩摩藩における洋学振興という大きな枠組みの中でとらえるべきであることを痛感した。

（福井県立短期大学第一看護学科）